

三鷹の「私」新境地開く

文人の
武蔵野

身長174、痩せ形で猫背。小説家太宰治（1909～48年）は、当時の日本人男性としては上背のある方で、濃い眉毛と細い指が印象的で、煙草は指の根元に深く挟んで吸っていました。

結婚した太宰が三鷹の下連雀の家に居を定めたのは1939年（昭和14年）、30歳の年でした。太宰はその家を「武蔵野のまん中にある私の家」と表現しています。上京以来、9年間に25回の転居を重ねましたが、三鷹に越して

太宰治 ①



太宰の暮らす家があった付近の街並み（三鷹市で）

からは定住します。早朝から精力的に小説を執筆する生活を送り、相変わらずの放蕩は身近なところでしていたようです。

三鷹駅界隈に自宅を含めてプライベートルームな仕事場が複数あり、それぞれに世話をする女性がいまいました。結核もちで

したが酒豪で健脚。新宿から三鷹まで歩いて帰ることもありました。普段の行動範囲は、三鷹駅南口商店街周辺から線路を南北に跨ぐ陸橋辺りまででしょうか。人前では眼鏡をかけたままでしたが極度の近眼で、女性と歩いている時に妻の姿があっても気づかなかったといわれています。

三鷹に住んで1年後、太宰は小説「乞食学生」（40年）を発表します。作中人物「私」の職業は小説家、住まいは三鷹、「下手な作品」しか書けないことに苦悩しています。井の頭公園内の玉川上水の土堤を訪れ全裸の少年に出会った「私」は眠りに落ち、夢という新たな物語を得ます。家族のいる「たのしい我が家」ではない作品が描けない。そんな「私」が自宅以外の場所、新境地を開いた物語。小説「乞食学生」からは、当時の太宰の執筆生活スタイル

も想像されます。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「太宰治全集3」

「ちくま文庫」の全集シリーズをお勧めします。太宰治の全集は全10巻です。「乞食学生」を所収する3巻には、同じく三鷹という地名が登場する「畜犬談」「鷗」「善歳を思う」も収録されています。川の増水の場面が当時の玉川上水を想起させる「走れメロス」も3巻で読むことができます。

太宰治全集3



（ちくま文庫）